

新しい学問と民衆文化の誕生

1 目標

杉田玄白が「解体新書」を著すきっかけとなった「解剖」の様子を知り、実際の執刀者である「老人」の姿を通じて、被差別身分の人々が労働を通じてすぐれた知識や技術を持ち、近代医学の礎石づくりに貢献したことに気づく。

2 学習計画（全2時間）

- (1) 解体新書と腑分け（1時間）
- (2) 被差別身分の人々の医学への貢献（1時間）

3 展開

- (1) 解体新書と腑分け

主な学習活動	留意点
1 「解体新書の表紙」を見て解体新書について、知っていることを発表する。	資料1 解体新書の表紙(巻末資料) 蘭学の医学書「ターヘルアナトミア」を翻訳した杉田玄白、前野良沢のことや、解体新書によって正確な知識が広がったことなど、果たした役割の大きさを確認させる。
2 自分たちがどれだけ人体について正確に把握しているか、班で協力して人体の配置を考える。	資料2 人体の配置図シート(P63) (巻末資料15) シートを各班に配布し、班で協力して配置を考えさせ、班ごとに発表させる。 医学の発展には、正確な人体把握が欠かせないことを実感させる。 作業が終了したら、正しい配置図を提示する。
3 「腑分けに立ち会った絵」を見て、杉田玄白がどの人なのかを想像する。	資料3 腑分けに立ち会った絵(巻末資料13) 執刀者が杉田玄白であると考えられる子どもが多いと予想される。
4 資料3で、執刀している人が誰であるのかを考える。	今までの学習を振り返り、被差別身分の人々が死牛馬の処理などに従事することにより、「解剖」する技術を持っていたことを想起させる。



小塚原処刑場跡に建つ延命寺

(2) 被差別身分の人々の医学への貢献

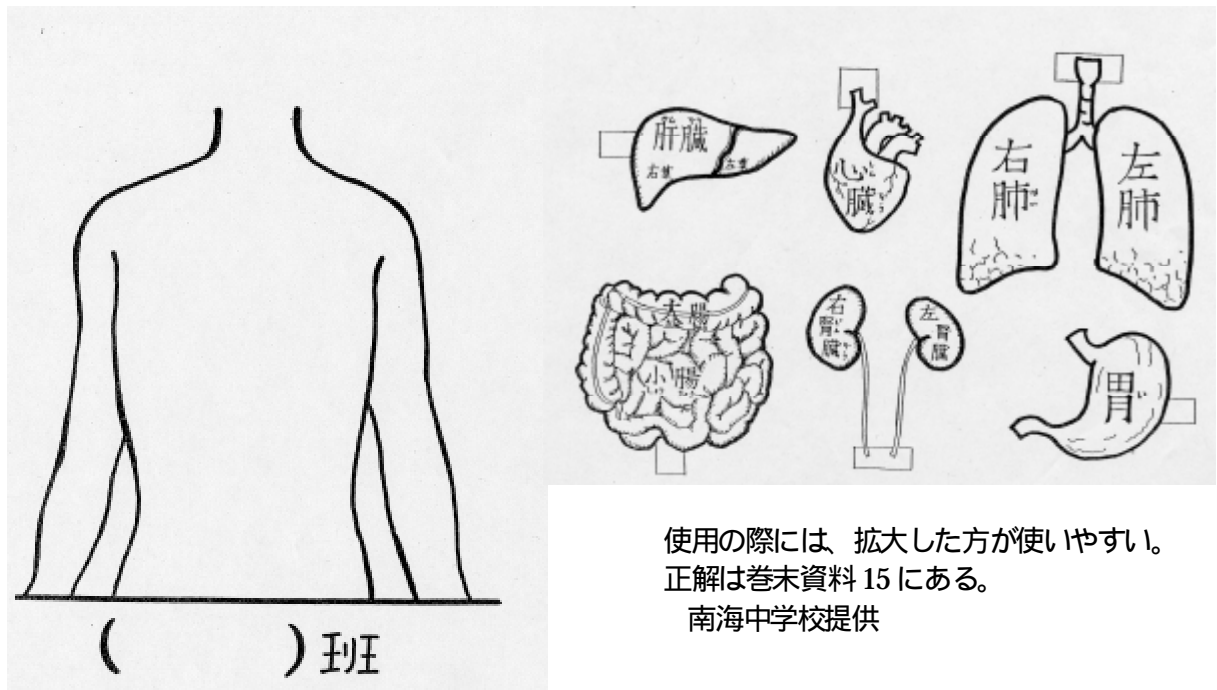
主な学習活動	留意点
1 前時の復習	「腑分けに立ち会った絵」を提示し、「解剖」の執刀者が老人であったことを確認する。
2 なぜ、杉田玄白は自分で執刀しなかったのかを考える。	<p>資料4 ワークシート(P64) 民衆の抱く死への恐れや「ケガレ」意識に杉田玄白自身もとらわれていたことに気づかせる。また、玄白などの医者自身が、「解剖」する技術を持ち合わせていなかったこともおさえておきたい。 (グループで話し合わせてもよい)</p>
3 「腑分けの名手」を読み、「老人」はどうしてこのような技術や知識を持っていたのかを考える。	<p>資料5 腑分けの名手(P65) 被差別身分の人々の仕事から想像させるとともに、玄白が「老人」をどう評価していたのかも、あわせて考えることができるようにする。</p>
4 学習を通して感じたことをワークシートにまとめる。	<p>資料4 ワークシート(P64)</p>

トピック：病院建設資金を、穢多頭弾左衛門に頼んだ幕府

幕末の鳥羽・伏見の戦いにより負傷し、江戸に逃げてくる兵士を治療するために、幕府は「海陸軍病院」の建設を計画した。そして、この病院で収容する負傷兵の看護や食事の世話を、幕府は穢多頭弾左衛門に行なうように命令を与えた。弾左衛門は、多額の建設資金を提供し、弾左衛門配下の者たちがこの任についた。このことは被差別部落と医療との結びつきがなしにないものであるとともに、弾左衛門には病院建設に協力できるだけの財力があったことを示している。

【参考】上杉聰 「部落史がわかる」1997 三一書房

資料2 人体の配置図作成シート



使用の際には、拡大した方が使いやすい。
 正解は巻末資料15にある。
 南海中学校提供

資料4 ワークシート

ワークシート

名前()

- 1 杉田玄白は、なぜ、自分で執刀しなかったのでしょうか。

- 2 「老人」は、どうしてこのような解剖の技術を持っていたのでしょうか。

- 3 今日の学習を通じて感じたことを書きましょう。

腑分けの名手

1771年の春のことでした。わたしは、オランダ語で書かれた『ターヘルアナトミア』という医学書を手に入れることができました。わたしはもちろん1文字も読むことはできなかったのですが、図にかかれています、内臓、骨格のぐあいなどが、今まで見たり聞いたりしたものとはたいへんちがっていましたので、これは1度、身体の内部を実際に見てみたいものだと思いました。

すると、奉行所より、「明朝、骨が原にて腑分けを行うので、希望があればおいでください。」との知らせを受け取りました。わたしは、翌朝、友人である前野良沢、中川 淳庵をさそい、ともに骨が原に向かうことになったのです。

さて、腑分けのことは、穢多の虎松というものがすぐれていると聞いていたので、たのんでおいたところ、その日はあいにく急病で、代わりにその祖父である90歳ぐらいの老人が腑分けを行うことになりました。とても元気な老人で、若いときから腑分けを何度か行ったと話してくれました。

その日も、老人は、あれこれと指し示しては、「これは心臓でございます。そしてこれは、肝臓、これは胃であります。」などと説明してくれました。また、「これは、名前は知りませんが、自分は若い頃から数体を手がけておりましたところ、これは必ずこの場所にあります。」などと言ってわたしたちに示してくれました。

わたしたちは、手に持っていたオランダの解剖書とてらしあわせてみたところ、一つとしてその図とちがっているものはなく、まったく同じであることにおどろきました。

翻訳の決意

帰り道、わたしは前野良沢や中川 淳庵と語り合いました。

「今日の腑分けは本当におどろくことばかりであった。かりにも医者を仕事としているものが、その医学の基本である人体の本当の姿を知らずにいたことはたいへん面目ないことである。この『ターヘルアナトミア』を少しでも翻訳することができたならば、きっと身体の内外のことが多くの人にはっきりとわかって、治療に役立てることができるであろう。なんとかしてこれを翻訳したいものである。」

わたしのことばに2人とも「まったく同感である。」と言い、さっそく3人で翻訳の作業にとりかかることになりました。